

## VII. 社会的活動

## 1. 社会的活動への取組み

### (1) (学) 東海大学エクステンションセンター福岡講座

目的 開かれた大学として地域社会との交流を深め、地域社会の生涯学習、文化経済の向上に貢献すること。

対象 一般市民、本学学生および教職員

#### 実施期日・講師・演題

回	開催日	講師	演題	受講者数	会場
1	2008. 11. 15	道の駅むなかた 館長 山崎宏幸 氏	「宗像における観光と流通」	33名	本学 2102教室
		宗像市民を中心として、「今後の宗像ブランド」について講演。			
2	2008. 11. 29	マリンワールド海の中道 館長 高田浩二 氏	「水族館の役割とは」	22名	福岡ガーデン パレス
		福岡市内に会場を移し、「水族館の役割と今後」について講演。			
3	2008. 12. 11	東海大学教養学部 教授 園田 矢 氏	「2008年北京オリンピック後の中国の政治と経済」	97名	小倉ステーションホテル
		北九州市内の会場を使用し、「急速な発展を遂げる中国」について講演。			

### (2) 観光文化研究所

#### 1) 運営方針

本研究所は、1995年6月、内閣総理大臣の諮問機関である「観光政策審議会」の答申にもとづき、且つ地元九州における福岡県経済同友会などの要請に対応する形で1996年4月に設立された。

観光産業が国家の基幹産業として認識されるようになった昨今、観光への取り組み方も、環境への配慮など従来とは異なる視点が求められている。本研究所では、21世紀における観光産業のあり方について、その課題を明らかにし、実践的な活動を通じて、観光の健全な発展を図ることを目的としている。

福岡を中心とする北部九州は、以前から異文化交流の盛んな所であったが、近年、発展著しい東アジア地域と我が国との接点として国際化が進んできた。また観光は地元九州・沖縄でも地域経済を支える基幹産業として成長しており、それだけに地域経済の活性化や、生活環境の保全などさまざまな課題を抱えていることも事実である。

こうした理由から、九州という立地を生かしながら、広く国際社会を見渡し、国内との連携を図りつつ、新しい時代における観光のあり方を明らかにすべく、本学に観光文化研究所が開設された次第である。

#### 2) 活動の基本方針と特色

観光文化を学際的に捉えるため、比較文化や国際地域文化圏研究等を含むフィールドワーク、高度情報社会の基幹システムに成長したインターネット等のIT技術の集積、地域や観光産業と連携した高度な社会性を基礎に、現代社会で要請されている「観光文化研究の基礎づくり」をすることが本研究所の第一の目的である。

また現代社会において、観光の果たしている役割はきわめて重要であり、本研究所では従来、さまざまな分野で個別に研究されていた観光を、それらの成果を踏まえながら、統合的な視野から学術的に研究することを目的としている。

具体的には、国際化時代に観光の果たしている社会的、経済的な役割を明らかにし、次世代の産業概念として注目されているホスピタリティという視点からのアプローチを図ることを研究テーマとするとともに、21世紀の課題とされている「環境保全」を観光という分野から推進するエコツーリズムの研究や、地域再生という視点からの地域における観光の取り組みに力を入れているのが、本研究所の特色である。

### 3) 観光文化教育に関する研究

観光文化の教育に関する研究として、以下に挙げる活動を実施している。

- (a) カリキュラムの研究
- (b) インターネット等マルチメディアを活用した多角的、多元的教育の研究
- (c) エコツーリズム、地域ツーリズムに関する研究及び研究会の開催
- (d) 教育評価の測定に関する研究
- (e) 学内外の関連教育機関との提携、交流、人材の発掘や育成

### 4) 観光文化における関連諸科学との総合研究

観光文化そのものに関する理論研究、および観光文化と関連する諸科学との学際的な研究として、以下に挙げる活動を実施している。

- (a) 観光文化の普遍的命題の研究
- (b) 比較文化や海外文化圏地域研究などとの共同による観光文化の深化と向上についての研究
- (c) 観光文化の経済・社会への波及効果の研究
- (d) 観光文化の質的・量的環境動向（予測）に関する研究
- (e) 観光文化に関する公開講座や研究会等の開催と講師の派遣
- (f) その他、研究所にふさわしい諸活動

#### \*備考

本研究所は、上記の諸研究の他にも学内外に広く研究テーマを公募していく方針である。特に若手研究者の発掘と育成のための産官学共同による学術論文の募集と、共同研究の充実を図る。

### 5) 活動概要

#### a. 観光文化研究所所報第 11 号の刊行

2009年3月20日付けで所報12号を発行した。第12号は、研究所所員による研究論文に加え外部の研究者からの寄稿及びエッセイなど計7編の記事を掲載した。発行部数は700部、装丁はA4判、総頁数74ページ。

掲載原稿は下記の通り。

九州における中国人旅行者受け入れの現状と課題	宮内 順
日本におけるエコツアーの類型	大方優子
離党問題と観光地化に向けた島づくりの可能性－北九州市小倉北区藍島を事例として	竹内裕二
初夏のイングランドを訪ねて	岡寄八重子
学校法人東海大学 第39回海外研修航海に参加して	北濱幹士
沖縄－雑感	神山高行
田熊石畑遺跡の保存を求める運動について	矢田公美
中国と日本文化の相違点－和について	張アンナ
Visiting Northern Maine	Mary Yoshioka

#### b. 講師の派遣

宗像市の主催するルックルック講座、高齢者大学、さらに近隣自治体の実施しているシニアカレッジ等に講師を派遣し、「地域と観光」等についての講演等を行った。

#### c. 外部機関との協力、共同研究

##### (1) 宗像市渡船運営審議会

宗像市は、玄海町、大島村との合併により、新生宗像市として再スタートを切ったが、宗像市に併合されることになった大島村、地島では過疎化、高齢化が進み、離島への渡船サービスの健全な運営が重要な課題となっている。宗像市では、合併を機に、島民の利便性を損なうことなく、渡船の健全な運営を実現するために、宗像市渡船運営審議会を設置、路線、便数、料金の見直しを図るとともに、観光による離島の活性化のためのインフラとしての渡船の位置づけを検討している。観

光文化研究所は、こうした離島における交通サービスの確保、地域社会への協力、将来的に観光による離島の活性化などの観点から、審議会に参加し、地域との協力体制の強化を図っている。

## (2) 観光振興を目指す食と農の循環研究会

宗像観光協会、宗像市市民環境部資源廃棄物課、同産業振興部商工観光課、同農業振興課、同市民環境部環境保全課、宗像市商工会、玄海ホテル旅館組合等と共同で、宗像市玄海地区における循環型システムの構築と環境に優しい観光への移行に取り組んでいる。

具体的には、宗像市玄海地区のホテル・旅館・飲食店から排出される年間 600 トンに及ぶ食品残渣を資源の有効活用、環境保護の観点から、①食品残渣の有機肥料化を行い、②有機肥料を使った有機野菜をブランド化し、③宿泊施設、飲食店に提供するという循環システムを構築、さらに、こうした地域環境に優しいシステムの上に、環境調和型の魅力的な観光地としての玄海をアピールし、地域振興と環境保全を目的とした新しい観光の考え方であるエコツーリズムを推進するというものである。観光文化研究所では、地域との連携、エコツーリズムの実践という視点から、研究会に参加し、共同研究を行っている。

## (3) 特産品開発事業

宗像市商工会と協力、宗像農協、鐘崎漁協、宗像漁協など地元の各種団体とともに宗像エリアの特産品開発の推進を図っている。具体的には、宗像の名産、特産品を「むなかた季良季（きらり）」ブランドに認定するほか、地元で生産された食材を用い、宗像を代表する独自の特産品開発を助成している。観光文化研究所では、特産品開発委員会およびむなかた季良里認定事業委員会に委員を派遣し、特産品開発事業の振興を図っている。

## (4) 着地型旅行商品開発・流通基盤整備事業

社団法人全国旅行業協会と共同で、地域密着型の着地型旅行商品の開発（地旅）と事業モデルの構築に取り組んでいる。着地型旅行商品とは、従来の出発地をベースに組まれたパッケージツアーと異なり、地域を主体に、体験交流型のプログラムを開発し、観光による地域活性化を具体化するというもので、2008 年度は、山口県が実施している地旅事業のインタープリター育成講座への指導、協力を行った。

## (5) 中国人旅行者の現状と課題の実態調査

西南女学院大学の観光グループとの共同研究により「中国人旅行者の現状と課題」の実態調査に取り組んでおり、2008 年度は福岡県を中心に、中国人旅行者に関係する 15 の行政機関、観光関連の民間企業などにインタビュー調査を行った。

## 6) 所員構成

所長	宮内 順	国際文化学科教授
研究所員	吉岡メリーエレン	国際文化学科教授
研究所員	神山 高行	国際文化学科准教授
研究所員	大方 優子	国際文化学科講師
研究所員	北濱 幹士	国際文化学科講師
研究所員	竹内 裕二	国際文化学科講師

## (3) 地域総合連携研究室

### 1) 運営方針

本研究室は 2007 年 6 月、学生教育に主眼を置いた地域活動特を活発化させ、地域との連携強化を促進させることを大目標として学内に設立した。

住民参加の取組みが、各省庁の取組としての柱になっている昨今、まちづくりへの取組み方も、地域住民が主体性を持った動きへと従来とは異なる視点が求められている。本研究室では、今後の住民参加や地域活性化活動のあり方について、その課題を明らかにし、実践的な活動を通じて、地域づくりの健

全な発展を図ることを目的としている。

この目的を踏まえた上で本研究室は、学生の教育を基本として、その教育の場を地域に求め、現存する地域の課題を教育の課題とし、地域住民と一緒に課題解決のために学生が活動することによって、その成果がリアルに地域活性化につながる流れの取組みを行う。

## 2) 活動の基本方針と特色

地域活動を学際的に捉えるため、アクションリサーチ法を基本とした実践活動等を含むフィールドワーク、ICT の活用、地域の各セクターと連携した活動を基礎に、多様化した社会で要請されている「時代の変化に対応した地域づくり」を行うことが本研究室の第一の目的である。

また多様化した社会において、地域での実践活動の果す役割はきわめて重要であり、本研究室では従来、様々な分野で個別に研究されていた社会システム学を統合的な視野から学術的に研究することを第二の目的としている。

具体的には、多様化した社会における地域社会の経済的活性化を視野に入れた地域活性化への住民参加の役割を明らかにし、次世代の地域づくりに欠かすことのできない概念として注目されているホスピタリティ、お互いさまという視点からのアプローチを地域に醸成させことを研究テーマとするとともに、今後課題とされている「地域での人材育成」を地域づくりという分野から地域再生という視点に焦点を当てた取組みに力を入れているのが、本研究室の特色である。

## 3) 地域活動教育に関する研究

- a. 学生の積極的行動力の育成
- b. 地域に山積するリアルな課題を系統的に解決する調査研究
- c. 産官学民連携による実践的地域活性化に関する研究
- d. 地域活性化に関する実践的取組み研究
- e. 地域活性化に関連する学内外の各種機関との提携、交流、人材の発掘や育成
- f. マルチメディアを活用した多角的、多元的教育の研究
- g. 学生の実践力育成に関する評価測定に関する研究

## 4) 活動概要

### a. 仮想会社の設立

多様化した社会において、求められる学生を育成することを主眼に置いた仮想会社の設立を行った。この会社の名前は、「可歩四季開者 Time (かぶしきかいしゃ ティータイム)」。社員は、学生。役員は、北九州市小倉北区役所まちづくり推進課 課長、株式会社日本旅行 主任、藍島自治会 会長が就任した。本学からは、学長と教員1名が就任した。

### b. 活動理念

本学の社会的活動に対する理念としては、学内だけが教育現場ではないという観点から、地域に教育の場を求め、「地域が教室、地域の人々が先生」という理念のもと、地域と連携した教育・研究の推進を行う方針を打ち出している。これまで、大学における社会的活動といえば、地域の教育力向上の観点から講演会などの開催や、教員が各種諮問委員という立場で地域活動に関与することが多かった。しかし、この従来型の参加スタイルではなく、全学で地域に参加する教育体制の構築に努めている。このような考えに基づき、「地域資源開発」という講義を平成20年度より開講し、学生自身の生きる力の育成、学生が社会的活動へ積極的に関与するためのキッカケや考え方などを主体とした実践的取組を通年して行っている。この取組みは、文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に採択された(詳細については、II.2.(4)で述べる)。

### c. 実践的教育型ツアーの実施

2007年度に引き続き、北九州市を活動舞台としてツアーを開催した。今年度は、昨年の藍島コースとは別に、小倉コース、若松コースの2コースを増やした。

2008年度は、「地産地消」をテーマとし、上記の3コースのツアーを設定した。ツアー全体の募集タイトルは、「北九州できたて発見ツアー」とした。

#### (1) 藍島コース

2008年7月19日(土)に北九州市小倉北区にある離島・藍島で「藍島ブランドを巡る旅」とい

うコース名のツアーを実施した。参加者数は、63名。このツアーに対して103名の方が応募してきた。そのうち65名を抽選。当日のキャンセルが2名いた。

ツアー当日は、天候は好天で、散策するには少し日差しが強い日和となった。ツアーの大まかな流れは下記の通りである。

- 9時 受付開始
- 9時30分 参加者集合
- 10時30分 藍島行きフェリー出発
- 11時05分 藍島到着
- 11時30分 開会式（藍島漁村センターにて）
- 12時 昼食（藍島の婦人部の方々による食事の提供【参加者自己負担】）  
藍島島民による歓迎会（北九州市無形民俗文化財「藍島の盆踊り」の披露）
- 13時00分 散策開始  
散策ルート：藍島漁村センター→白州灯台の見える丘→旗柱台  
→千畳敷（20分の休憩）→藍島漁村センター
- 15時45分 閉会及び解散式（藍島漁村センターにて）
- 16時30分 小倉行きフェリー出発
- 17時05分 小倉港着

### (2)若松コース

2008年8月5日（火）に環境を中心とした行政活動を展開している北九州市若松区で「環境と地産地消」というコース名のツアーを実施した。参加者数は、45名。このツアーに対して74名の方が応募してきた。そのうち45名を抽選。当日のキャンセルはいなかった。

ツアー当日は、天候は良好で、散策するには少し日差しが強い日和であったが、バスでの移動のため大きな問題ではなかった。ツアーの大まかな流れは下記の通りである。

- 8時 受付開始
- 8時30分 参加者集合
- 9時 ツアーへ出発（車中にて開会式）
- 9時10分 しゃぼん玉工場見学
- 10時40分 若戸大橋橋台内部見学（戸畑側）
- 11時50分 響灘緑地 風力発電施設見学
- 12時30分 昼食（旧古河鋳業若松ビルにて）
- 13時30分 若松南海岸通り散策
- 14時30分 若戸渡船クルーズ開始  
クルーズルート：若戸渡船乗場（若松側）→響灘・洞海湾入り口部→若戸大橋→八幡東区東田地区→若戸渡船乗場（若松側）
- 15時40分 閉会及び解散式（車中にて）
- 16時 JR折尾駅解散

### (3)小倉コース

2008年8月6日（水）にモノづくりを中心に経済活動を展開している北九州市小倉北区及び周辺エリアで「生活と地産地消」というコース名のツアーを実施した。参加者数は、45名。このツアーに対して63名の方が応募してきた。そのうち45名を抽選。当日のキャンセルはいなかった。

ツアー当日は、天候は良好で、散策するには少し日差しが強い日和であったが、バスでの移動のため大きな問題ではなかった。ツアーの大まかな流れは下記の通りである。

- 8時 受付開始
- 8時30分 参加者集合
- 8時50分 ツアーへ出発（車中にて開会式）
- 9時 新日鉄八幡工場見学
- 11時 小倉南区合馬地区の天然水製造工場見学
- 12時15分 昼食（小倉北区「一万石」にて）
- 13時10分 TOTO小倉工場見学
- 15時20分 且過市場見学

16時40分 閉会及び解散式（車中にて）

17時 JR小倉駅解散

#### d. 外部機関との協働活動

##### ● 「心が元気になる講座」（イオン若松ショッピングセンターとの協働活動）

地域の集客施設として北九州市若松区に店舗を構えている「イオン若松ショッピングセンター」から、来客者へ商品とは別に大学の知的財産を寄与する仕組みがないものかという調査実践研究依頼があった。

この依頼に対して、考案したものが「心が元気になる講座」で、年に夏冬2回行うものである。内容的には本学教員が、会場に行き約30分～1時間弱程度の講義を1日3人で行う。テーマに関しては、イオン九州株式会社が営業活動の柱としている「環境」を中心に持ってくれば、それに付随する内容は本学サイドに任せるものである。大まかな流れは、下記に示すとおりである。

夏号

7月26日（土）：テーマ「食と環境」

赤井准教授 インドの食文化の変化

真下教授 フランス料理は堅苦しい？

宮内教授 あの旅、あの味

8月30日（土）：テーマ「くらしと乗り物」

吉岡教授 アメリカの鉄道

北濱講師 望星丸で行く南太平洋

竹内講師 若戸渡船の今昔

冬号のテーマ：「くらしと環境」

2月9日（土）

宮内教授 言葉から見た旅の歴史

大方講師 あなたはエコ消費者？～くらしの中の環境心理学

宮川講師 くらしの中で数学は役に立つの？

竹内講師 割り箸と環境破壊？

3月29日（土）

伊津教授 くらしに役立つ地質学

宮内教授 地域おこしと旅の役割

矢原准教授 くらしと技術革新

竹内講師 私たちのまち「北九州市」と環境

この取組みにより、時間帯によって聴講者数に変動があるものの各講座20～60人程度の聴講者が受講した。このような形式の講座を教員自らが積極的に実施することにより、教授技術向上に努めたい。

## 5) 今後に向けて

地域社会に信頼・支持される短期大学であるために、本学の教員は地域社会との交流を深め、地域社会の生涯学習、文化経済の向上に積極的に貢献している。昨年度の反省に基づき今年度は、地域の人々と本学学生及び教員が交流する機会を増やした。その結果、活動の幅が広がりを見せ始めたため、今後の活動が増えてよい半面、身動きが取れない活動にならないための工夫が求められる。この課題を解決するために、来年度に向けて活動する必要がある。

## 2. 国際交流・協力への取組み

### (1) 海外研修

#### 1) 韓国短期留学

<プログラム概要>

対象：指定関連科目である「韓国語Ⅰ」を履修している国際文化学科及び情報処理科の1

年生

授業科目：「韓国短期留学」（国際文化学科専門科目 2 単位）

参加者数：学生 9 名、引率教職員 1 名

目的：韓国語のコミュニケーション力の向上を目的とし、語学の授業が中心となっているが、同時に、韓国での実際の生活体験を通して、言葉をその文化とともに総合的に学ぶために必要な韓国文化研究と、将来アジアの観光分野で活躍することを希望する学生向けの観光研修プログラムも体験できるように構成されている。

期間：2008 年 8 月 5 日（火）～8 月 19 日（火）の 15 日間

場所：東義科学大学（韓国釜山市）

参加費用：80,000 円（内訳：旅客運賃、港使用税、宿泊代、旅行傷害保険料、教材費、実習費、ツアー代）

## 2) ハワイ短期留学

<プログラム概要>

対象：指定関連科目である「英語 I」を履修している国際文化学科及び情報処理科の 1 年生

授業科目：「ハワイ短期留学」（国際文化学科専門科目 2 単位）

参加者数：学生 21 名、引率教職員 2 名

目的：ハワイ東海インターナショナルカレッジ（HTIC）のネイティブ・スタッフによる英語の語学研修を中心とした 10 日間の短期留学プログラム。HTIC 内での語学研修や屋外での様々なフィールドワークへの参加を通じて、教室の内外で生きた言葉、コミュニケーション能力を重視した実用的な英語を学ぶ。

期間：2008 年 9 月 10 日（水）～9 月 19 日（金）の 8 泊 10 日

場所：ハワイ東海大学インターナショナルカレッジ（HTIC）

参加費用：200,000 円（内訳：航空運賃、宿泊代、食費、旅行傷害保険料、教材費、現地バス代）

※このプログラムには、法人から 1 人あたり 2 万円の松前重義記念基金の短期大学（部）派遣留学生奨学金の補助を得て実施している。

## 3) 中国短期留学

<プログラム概要>

対象：指定関連科目である「中国語 I」を修得、あるいは「中国語 II」を履修している国際文化学科及び情報処理科の 1 年生

授業科目：「中国短期留学」（国際文化学科専門科目 2 単位）

参加者数：学生 7 名、引率教職員 1 名

目的：中国語のコミュニケーション能力の向上を目的に、北京第二外国語学院が実施する語学プログラムに加え、中国での生活体験を通し、中国の文化を総合的に学ぶために必要な実地研修を織り込んだ科目で構成する。

期間：2009 年 3 月 1 日（日）～3 月 14 日（土）の 14 日間

場所：北京第二外国語学院（北京市）

参加費用：120,000 円（内訳：航空運賃、宿泊代、旅行傷害保険料、現地移動費）

## 4) 海外研修航海

<第 40 回海外研修航海>

参加者数：学生 97 名、団役員 14 名。うち、本学からは研修学生として国際文化学科 2 年 1 名（後 潟実可子）が参加した。

目的：学園の大学・短大に在籍する学生より広く公募・選考し、本学所有の海洋調査研修船「望星丸」（1,777 トン）を使用して諸外国を訪問し、海外の諸文化、諸事情に触れ、国際的視野に立った世界観・人生観の確立をめざすと共に、船内という限られた生活環境の中で、教員、仲間との共同生活を通じ協調性を養い、より豊かな人間形成をはかることを目的とする。



研修期間：2009年2月15日～3月29日（43日間）

研修都市等：ボンペイ→フナフティ→ポートビラ→ヌメア→コスラエ

参加費用：398,000円＋燃油サーチャージ40,000円

## **（2）留学**

### **1）交換留学**

学校法人東義大学と学校法人東海大学の基本協定に基づく東義科学大学（韓国）と本学との交換留学生の派遣に関する覚書（2008年2月25日付締結）に則り、国際文化学科1年1名（原田秋乃）が留学した。留学期間は2009年2月27日～2009年6月30日。

### **2）派遣留学**

東海大学海外派遣留学制度により2008年度に留学した学生はいない。